

ボランティア情報



～つながる、広がる、福祉教育～

福祉教育 わたしたちの実践

大阪府 大阪市社会福祉協議会 ボランティア・市民活動センター

ゆ あさ はるか
由浅 悠さん



【福祉施設との協同実践で、子どもたちにとって福祉を身近に】

大阪市社会福祉協議会では、福祉教育で疑似体験をした子どもたちが「怖かった」などのネガティブな感想に終始しがちである点に課題を感じていました。そこで、西成区社会福祉協議会(以下、区社協)が2021年度から区内の小中学校で実践したプログラムがボッチャの体験です。きっかけは、多くの福祉施設を運営する(社福)ヒューマンライツ福祉協会の山脇さんが開催しているボッチャの大会を、区社協職員が見学に訪れたことでした。「スポーツを福祉教育のツールにすることで、子どもたちの視点を『障害があるからできない』から『障害があってもできる』へと変えられるのではないかと考えました」と当時、区社協に在籍していた由浅さんは振り返ります。

もともと区社協と山脇さんにはつながりがあったため、連携はスムーズに進みました。協同でプログラム作りを行う際、由浅さんが意識したのは、福祉施設の職員や当事者に、子どもたちに関わってもらえる内容にすることです。由浅さんはそのねらいを次のように語ります。「社協職員が当事者の日常を伝えようとしても、半分ほどは想像になってしまいます。施設職員や当事者に直接お話しただくことで、子どもたちに福祉の現場をより身近に感じてもらえると考えました。

さらに、実践の目的を関係者全員で共有するために説明会を開催したほか、施設職員や当事者がどのような思いで協力を決めたのかについての聞き取りも行い、プログラムに落とし込むことを心

がけました。聞き取りのなかで特に多かったのが「福祉を正しく理解し、関心をもってほしい」との声でした。

こうした思いや区社協のねらいを反映し、プログラムでは施設職員や当事者が子どもたちに向けて話をする時間や、一緒にボッチャをする時間を設けました。特にボッチャをしている時は全員が楽しそうで、いいプレーが出るとお互いにハイタッチをするなど、障害の有無を感じさせない自然なコミュニケーションが生まれたそうです。施設職員や当事者からも「参加できてよかった」との声が寄せられました。

現在、ボッチャの体験は区内7つの小中学校で行われ、約10の施設から協力を得ています。この協同実践を市全域に広げていくことが目標です。

Contents

- P.2 ▶ **特集** 地域住民と関係人口との協働による地域づくり
- P.6 ▶ わたしにとってのボランティア
- P.7 ▶ キーパーソンから学ぼう!
- P.8 ▶ 災害ソ・ノ・ト・キ! | インフォメーション

地域住民と関係人口との協働による地域づくり

地域活動におけるボランティアには、その地域に居住する住民や通勤・通学する人というように、その地域に継続的なつながりがある方が多くみられます。一方、関係人口という言葉が生まれたように、地縁的な関わりが少ない人のボランティア活動も増加しています。本特集では、ボランティアの多様なカタチに注目した地域活性化の取り組みを紹介します。

事例 1

▶ 移住者が増えつつある町で、それぞれのかたちで地域活動に取り組む人々。「地域をよくしたい」との共通の思いをつなぎ、ネットワークを築くための場づくりをすすめる

長野県・軽井沢町社会福祉協議会



左から
山浦さん、篠原さん、
佐藤さん、高根さん

軽井沢町は人口約2万人、標高約1,000メートルに位置する高原の町で、国際的な避暑地として発展してきました。明治19年の宣教師アレキサンダー・クロフト・ショー氏の来訪にはじまり、政財界、文化人などを中心に別荘をもつ人が現れ、その数は昨年で約1万6千戸にまで増えています。近年は定年後に移住する人に加え、軽井沢風越学園が2020年に開校したことで、若い世帯の移住も増えています。昔からの定住者と新たな移住者、そして別荘を所有する季節移住者と町外からの通勤者・通学者など、多様な人々が関わる独特な町において、地域活動はどのように行われているのでしょうか。

軽井沢町社会福祉協議会

常務理事 事務局長 篠原 幸雄さん
ボランティアセンター 係長 高根 英貴さん

ボランティアセンター運営委員会

会長 高尾 幸男さん

花と緑の仲間たち

代表 山岸 征男さん

浅籬(せんろく)コミュニティカレッジ

発起人 坂本 那香子さん

多様な人が関わる独特な町のまちづくりとは

軽井沢町は、国際的な保健休養地として歴史を積み重ねてきた背景から、環境保全を中心とした地域活動が盛んです。また、町は昔からの定住者に加え、別荘所有者や移住者、町外からの通勤者や通学者と、さまざまな人たちが関わる多様性も有しています。こうしたこともあり、「まちづくり基本条例」(2007年施行)では、「町民」を「町内に住所を有する者」、「住民」を「町民、別荘所有者、滞在者、町内就業者及び

通学者」をさすとしており、そのすべての人の協働と連携でまちづくりを推進することが明言されています。ここでは、「関係人口」という言葉こそ明文化されていませんが、地域には以前から「まちづくりには関係人口の存在が欠かせない」との潜在意識があったといえそうです。

地域の団体同士の交流の場として「ちいき活動みほん市」を開催

軽井沢町社会福祉協議会(以下、町社協)のボランティアセンター(以下、

VC)に登録しているボランティア団体は53団体、登録者数は約1,400名です。町社協の高根さんによると「未登



ちいき活動みほん市の様子。各団体が思い思いに活動内容を紹介する

録で活動している団体も数多くあります」といいます。また、近年は移住者が増えていることから、移住者を中心とした新たなボランティア団体やカルチャー教室も多くなりました。しかし、園芸ボランティア「花とみどりの仲間たち」などで活動する山岸さんは「それぞれが広い意味でまちづくりに貢献しているながらも、横のつながりが少ないことを課題に感じていました」と語ります。そこで2011年、当時、VC運営委員長だった山岸さんと、町社協の職員が中心になって開催したのが「ボランティア活動見本市（後に、ちいき活動みほん市に改称。以下、みほん市）」です。VCへの登録の有無や設立の新旧を問わず、町内で活動する団体同士が交流し、ネットワークを築くことで、よりよいまちづくりをめざすことが目的です。

このみほん市は、長野市で評判の取り組みを山岸さんが視察し、ほぼ同じかたちを軽井沢町に取り入れたものです。各団体がボードにポスターや写真を使って活動内容を紹介したり、制作物を陳列したりします。コロナ禍による中止を除き、2011年から毎年1回開催し、今年は36団体99名の活動者と、一般来場者120名が一堂に会し、大きなにぎわいを見せました。

身近で気軽な情報交換の場として「月例情報市庭(いちば)」を設置

みほん市は毎年、非常に盛り上がりますが、VC運営委員会のなかでも「年に一度のイベントだけでは、熱量が長く続かず、その後の交流や協働の深化



ちいき活動みほん市は、活動者や来場者の交流の場としても盛り上がる

につながっている例が少ない」という意見もありました。そこで2017年、ボランティアや地域活動に取り組む団体・個人が定期的に交流し、ネットワークを築く場として設置したのが「月例情報市庭(以下、情報市庭)」です。運営はVC運営委員会が行い、町社協は会場の確保や設営、記録や広報などをサポートします。開催日時は毎月第3木曜日14時からで、最初の1時間で参加者全員が自己紹介や参加の目的を話し、残りの1時間で個別に対話したり、参加者の困りごとについて皆で解決法を模索したりします。その場で解決できない場合でも、後日アイデアの提供や協力者の紹介につながることもあります。

現VC運営委員会長の高尾さんは、情報市庭の運営方針について次のように説明します。「誰でも自由に、予約なく参加できます。声がけはしますが、無理に集めることはしません。それよりも定例で開催することで、情報市庭が地域の『習慣』になり、身近で気軽な情報交換の場として定着することを重視しています」。

一方で、例えば困りごとについては限られた開催時間のなかで必ずしも解決できるわけではないため、参加者の期待とのギャップも生じています。この点を含め、高尾さんは今後の展望を次のように語ります。「情報市庭を地域のコワーキングスペースとして毎日の常設型にし、行政や社協と密に連携できるようになれば、多くのニーズに応えられるようになると思います。そんな拠点の必要性を行政にアピールするためにも、開催を継続して



月例情報市庭の様子。活動の相談や情報共有、PRの場として活用されている

実績を積んでいきます」。

軽井沢町役場の小林那寛こばやしなひろさんは「ボランティアの皆さんは行政の制度だけでは行き届かない部分にも取り組んでくださるので、町としても積極的に協働したいと思っています」と語り、情報市庭のPRにも協力する意思を示してくれました。

町社協にとっても有意義な情報市庭の活性化をめざす

高根さんは、町社協のVCに登録に訪れる移住者について次のように語ります。「特に子育て世代の母親が多く、皆さんとてもエネルギーで、町社協の事業にも大いに協力してください」。そのひとりである坂本さんは、3年前に子どもの進学を機に家族で東京から移住し、昨年には地域活動に取り組む人をサポートする「浅麓コミュニティカレッジ」を設立しました。メンバーには東京在住の人も多いといい、坂本さんは「関係人口づくりに一役買っているかなと思います」と笑顔を見せます。

高根さんは担当者として、こうした団体や個人をつなぐためのアプローチがまだ足りていないとし、「情報市庭に参加していただくことでつながりを広げてもらえるよう、もっと情報発信に注力していきます」と力を込めます。

また、高根さん自身にとっても情報市庭は貴重な情報収集の機会になっています。「地域活動の状況を含め、町内のさまざまな情報を得ることができます。一つひとつの情報は点でも、それがいづれ人と人をつなぐ線になるはずです」(高根さん)。また、事務局長の篠原さんは次のように意気込みを語ります。「VCを中心に福祉のまちづくりをすすめます。人と人の心が通じ合うようなあたたかい町でなければ、本当にいい町とはいえません」。

多様な人々が関わる軽井沢町で、情報市庭とみほん市を中核とした地域活動がどう発展していくのか楽しみです。

助成金情報

(公財)日本フィランソロピック財団「パーキンソン病QOL基金」(2023年12月15日締切)

パーキンソン病患者のQOL向上を目的とする研究や支援活動等の事業で、既存事業・サービスをもとに拡大・改善する取り組みや新規事業・サービスへの取り組みへの助成。(詳細は「パーキンソン病QOL基金」で検索)

事例 2

「誰もが幸せに暮らせる地域づくり」を共通の目標に、住民・行政・NPO・社協がそれぞれの立場で力を尽くす ～持続可能な地域づくりのカギは活動する側の当事者性と主体性～

島根県・邑南町社会福祉協議会



前列左から、品川さん、岡本さん
後列左から、渡邊さん、日高さん、植田さん

邑南町は、2004年に3町村(羽須美村、瑞穂町、石見町)が合併して誕生した、広島県境の中山間地域にある人口約1万人の町です。子育て世代の移住は増えていますが、高齢化率は45%を超え、人口は減少し続けています。そんな邑南町を持続可能にしているのは、町村合併の前から地域住民に根づいている、「自分たちの困りごとは自分たちで解決する」という高い自治意識です。

邑南町社会福祉協議会(以下、町社協)では、社協ならではの知見を活かしながら、住民の一人ひとりの幸せを考えた取り組みを行い、地元NPOの江の川鉄道では、三江線(廃線)の鉄道資産や文化の継承を通じて、地域振興の取り組みを行うというように、それぞれが同じ目的をもって、地域住民と横並びで地域づくりに臨んでいます。

邑南町社会福祉協議会

地域福祉課 課長 渡邊 健二さん
地域福祉課 生活支援係 管理者 植田 康弘さん
地域福祉課 地域福祉係 管理者 日高 千菜美さん

銭宝地区別戦略実行委員会

委員長 品川 隆博さん / 岡本 和幸さん

NPO法人 江の川鉄道

会員 森田 一平さん

住民主体の地域活動の背景にある自治会活動で培われた主体性

邑南町は全国に先駆けて少子高齢化が進み、過疎化にともなう耕作放棄地や空き家の増加、商店の閉鎖、公共交通の撤退などの地域課題に、長期にわたり直面してきました。その分、危機感や自治意識も、早くから醸成されてきた地域だといえます。

2005年度に、邑南町が全39自治会を対象に「夢づくりプラン策定・推進事業」を実施した際には、大半の自治会が参加し、自分たちが望む将来の地域像を策定したそうです。ただ、この時は、事業主体である自治会役員の任期内での実践は難しかったといえます。

その後、2011年度から始まった「地域コミュニティ再生事業」においても、複数の自治会から成る全12地区の大半が、各地区の将来に向けた計画の策定と実践に取り組みました。この時は、住民主体の事務局が立ち上がったことで、住民の地域づくりに

対する意識がより高まっていったのです。

渡邊さんは「地域住民に根づいている『自分たちの困りごとは自分たちで解決する』という意識は、町村合併前から盛んだった自治会活動で培われてきた文化です」と語ります。また、日高さんは「住民の当事者性と主体性を育てるのが福祉教育。町社協でも小中高生に対し、たすけあうことの大切さを伝えていきます」と語り、渡邊さんも「大人が地域で活動する姿を、次世代に見せていくことが重要です。これも福祉教育です」と力を込めます。

事業の実現性を大きく高めた地区単位の事業計画と予算

邑南町の持続可能な地域づくりは、2016年度に「地区別戦略実現事業」(以下、地区戦)として新たなスタートを切りました。前2事業との大きな違いは、実施したい事業のある各地区に対し、年間で上限300万円(財源は国による地方創生推進交付金)という

大きな予算がついたことです。これにより計画の実現性が高まり、地区戦の第1期(2016年～2020年)では、全12地区が地区単位で多様な事業を展開しました。

なかでも、最も人口が少なく、高齢化率が50%を上回る布施地区は、持続可能な地域づくりが進んでいることで知られています。住民は、布施地区のことを「銭(地域資源)」と「宝(人・組織)」が生きる里として、親しみを込め「銭宝地区」と呼び、その名にふさわしいさまざまな事業に取り組んできました。

実行委員長の品川さんは、事業に臨む際の心がけについて次のように語り



ある日の銭宝キッチンのメンバー。左から三上さん、藤田(尚)さん、藤田(直)さん、漆谷さん

助成金情報

(公財)洲崎福祉財団「継続助成」の公募(2023年12月23日締切)

中長期的視点において、より多くの障害児・者のQOL向上、社会課題の解決に寄与する事業への助成。

(詳細は「洲崎福祉財団」で検索)

ます。「気持ちとしては『困っている人を支えよう』ではなく、『みんなで一緒に楽しく生きていこう』ですね。すべてにおいて『身の丈』が大切。活動メンバーが負担に感じるような『いくら稼ごう』といったノルマはつくらないほうがうまくいきます」。

品川さんとともに地域づくりに尽力してきた岡本さんは、活動の原動力について「今いる高齢者の困りごとを放っておいたら、いずれ自分の困りごとになりますから。あとは品川さんのような長けたリーダーに、人はついていくのだと思います」と語ってくれました。

銭宝地区が最初に実現させたのが、2018年開設の「銭宝の寄り合い処」です。空き家を活用したこの寄り合い処では、ひきこもりがちな単身高齢者を対象とした「サロン田屋」(週1回)や、対象を問わない「地域交流サロン」(月1回)が開かれ、住民が世代を超えて「顔の見える関係」を築いています。2019年には、地域住民が有償活動として高齢者の暮らしをサポートする「銭宝のくらし応援隊」(以下、応援隊)を発足させました。この傘下に「草刈・除雪部」「配食部(通称、銭宝キッチン)」「家事支援部」の3部会が置かれ、住民の各種ニーズに対応しています。2023年度からは国の集落機能強化加算金を資金としたリース車両の運用も始まり、住民の外出支援や応援隊の各種業務に活用されています。

なかでも、銭宝キッチンの活躍ぶりは目覚ましく、当初は1回につき30食ほどだった注文が、現在では60食ほどに増え、活動頻度も月に2回から4回に増えています。調理に加え、地場野菜を使ったメニューの考案、



夕食弁当は、おかずがぎっしり詰まって500円で、別途50円でご飯がつく

食材の調達、安否確認を兼ねた配達、収支の計算まで、銭宝キッチンの女性8名がシフト制で行っています。中心メンバーの三上さんは、事業継続の秘訣について「仲間との活動自体が楽しいことが大きいです。それに加えて、ワンコインの時給が自分のおしゃれ代やペットの医療費など、活動者それぞれの喜びのために使えることで、生活の幅が広がっていることもたすけになっています」と笑顔で語ってくれました。

廃線跡にトロッコを走らせ 関係人口を呼び込む

邑南町羽須美地域には、中国地方最大の『江の川』が流れています。かつては、この川に沿うようにしてJR三江線が走っていましたが、沿線の人口減にともない利用者も減ったことから、2018年に廃線となりました。しかし、その2か月後、三江線に思いを寄せる地域住民と鉄道ファンが『NPO法人江の川鉄道』を設立します。廃線跡にトロッコを走らせようと、地道な活動を続けた結果、2019年、邑南町が町内の宇都井駅と口羽駅を、JR西日本から無償で譲り受けることになったのです。そして2021年、念願のトロッコ運行が始まりました。運行区間は約1.6キロメートルで、運行日は月に4日程度ですが、高さ30メートルの鉄橋からの絶景とトロッコの姿を一目見ようと、県内外から多くの方が訪れるといます。

旧羽須美村出身で同NPOの設立メンバーでもある森田さんは、この活動の目的と今後について次のように語りま



運行日に車掌を務める森田さん(奥)と、江の川鐵道を愛するあまり移住してきた長谷川さん

す。「目的は三江線の歴史を将来に残し、この沿線と地域を盛り上げる活動を通じて、関係人口と地域をつないでいくことです。この活動の強みは、鉄道ファンがファンの域を超え、私たちと一緒にトロッコを動かす『当事者』になれること。この点に魅力を感じ、ともに活動をしてくれる仲間のなかには、来たら必ず米や野菜を買っていく人もいるし、移住してきてくれた人もいます。少しずつでも地域にぎわいを創出し、それが地域住民の『地域に対する誇り』につながってくれるとうれしいです」。

それぞれのアプローチの仕方 「みんなの幸せ」をみんなでめざす

自治意識の高い地域における、町社協のあり方について、植田さんは「地域づくり事業は続いていくことが重要ですから、事業計画の段階で、社協の視点で意見や提案をさせていただくことはありますが、事業が軌道に乗ったら住民の皆さんに委ねます。実践の過程で行き詰まった時に『社協がいるから大丈夫』と思っていただけるセーフティネットのような存在をめざしています」と語ります。渡邊さんは、これからの町社協のあり方について「社協も銭宝地区も江の川鉄道も、めざすところは『誰もが幸せに暮らせる地域づくり』で共通しています。関係人口を含めた地域づくりに関わる人、資源、手段が多様に存在するなかで、それらをどうつなぐかが、これからの私たちの役目だと思います。一方で、制度や住民のたすけあいでは解決できない生活困窮世帯の問題や、8050問題といった個別支援に特化していく必要があると考えています」と語ってくれました。

全12地区のうち、銭宝地区を含めた4地区が社協の手を離れ、住民主体での地域づくりを進めているといいます。残りの8地区の地域づくりにおいて、町社協が何をどうつないでいくのか、これからも目が離せません。

(社福)全国社会福祉協議会「令和5年度 ENEOS奨学助成」の募集(一次募集:2024年1月12日締切)

助成金情報

ENEOSグループからの寄付をもとに、児童養護施設、母子生活支援施設および里親家庭の児童たちの進学を金銭面から援助し、もって児童の社会的自立を支援するための助成。他の奨学金制度との併用可。(詳細は「全社協 ENEOS奨学助成」で検索)

わたしにとってのボランティア

次世代によるボランティアのいま

若者によるボランティア・市民活動は、若者の視点や感性、若者だからこそできることを活かしながら広がりを見せています。こうした若者の活動や思いを紹介することで、若者たちにとって「ボランティア」とは何か、さらに社協VCが若者とつながる地域づくりを考えるきっかけを提供します。



ボランティアリーダー
徳島市立高等学校3年
浦 瑠希さん

第8回

徳島県
徳島YMCA

団体紹介

大阪YMCAの管轄団体として40年以上にわたり幼稚園年中から高校生までを対象に、野外活動、キャンプ、サッカー、水泳などのプログラムを展開する。現在、ボランティアの大学生リーダー10名、高校生リーダー6名が活動中。

子どもたちとともに学び成長できるボランティアリーダーの醍醐味を満喫、自分なりのリーダー像を確立

徳島YMCAでボランティア活動を始めたきっかけは？

高校2年の春に同級生の一人から、「YMCAのボランティアリーダーをしている」と打ち明けられました。もともと子どもと関わることや自然にふれることが大好きな私は、友人の話に興味をひかれました。そこで体験で野外活動に参加してみたところ、とても楽しくて、ボランティアリーダーになることをその場で即決しました。当時、学校の部活にやりがいを見いだせなかったり、将来のビジョンを模索していた自分の前に、一瞬にして道が開けたようでした。それまでYMCAとは何なのかも知らず、ボランティアの経験もありませんでしたが、「自分がやりたかったのはこれだ!」と思えた背景には、困っている人に手を差し伸べずにはいられない、生来の性分せいぶんがあったかもしれません。

ボランティアリーダーの魅力や醍醐味は？

子どもたちにとって大学生のリーダーは、大人のスタッフとは違う、お兄ちゃん・お姉ちゃん的な存在ですが、高校生リーダーは年齢に近い分、より近い存在です。大学生リーダーと比べると知識や経験は少ないかもしれませんが、子ど

もたちと同じ目線や立場に立ちやすい高校生リーダーだからこそ、できることもあると思っています。リーダーを1年間やってみて、最近自分なりのリーダー像が確立できつつあります。例えば、子どもたちは一人ひとり違うから、それぞれに合った関わり方ができるよう、常に心がけています。また、何かをしてあげるのではなく、自分も夢中になって楽しむことが、回り回って子どもたちのためになるのだと、わかってきました。その過程で子どもたちだけでなく私たちリーダーも、刺激を受け、新たな学びや発見を得て、お互いに高め合えるところが、とてもいいなと思っています。子どもたちが自分の力で成長する姿を目の当たりにした時は、感動で胸が一杯になります。

若者のボランティア活性化のため大人は何をすべき？

ボランティアを始めたい人と受け入れる側の架け橋を、もっと太くしてほしいですね。関心をもつ人は潜在的には多いはずなのに、出会えていないのではないのでしょうか。マッチングサイトのようなプラットフォームがあって、「やってみたい」という気持ちが芽生えた瞬間を逃さないようにできれば、ボランティアの裾野は一気に広がる気がします。



夏休み等、長期休暇のキャンプの様子。その他にも、阿波おどりやクリスマス会など、多くのイベントを行う

高校卒業後も大学生リーダーとして活動を続けたいですし、ゆくゆくはYMCAのスタッフになることも考えています。子どもたちが本来もっているけれども、親や先生にも引き出せない「見えない力」を引き出して伸ばすことができる場所からです。子どもたちの「できた!」を増やす手伝いをしながら、自分が得た知見を再び還元する、そんな「学び合い」をこの場所で実現していきたいです。

社協VCが若者とつながるには？

社協の皆さんが、私たちの活動を教育委員会や高校、大学に結び付けてくれることを期待しています。日々学びを得ている学生にとっては、最も近い存在の先生から周知されることでボランティア活動がより身近になり、社協とつながる若者も増えるはず。私たちは、若者が視覚的にYMCAの活動をイメージできるよう、SNSでの発信も工夫していますよ!

公益財団法人 大阪YMCA
徳島YMCA 事業長 竹中 豊明さん

イベント・
講座情報

(特非) 日本NPOセンター

「NPO法25周年記念フォーラム」「市民セクター全国会議2023」のご案内 (2023年12月1日(金)・2日(土)開催)

12月1日に特定非営利活動促進法(NPO法)が施行25周年を迎えるにあたり、NPO法25周年記念フォーラムと市民セクター全国会議2023を開催。(詳細は「日本NPOセンター」で検索)

キーパーソンから学ぼう!



お互いにつながる
はじめの一歩

人と人のネットワークをつなげながら、人々の生活に直結するさまざまな困りごとにアプローチをしているキーパーソンを紹介します。

さまざまな分野のキーパーソンから協働のヒントを探り、読者の皆さまもはじめの一歩を踏み出しましょう!

第8回

前に進もうとする女性の回復力と強さを信じ、徹底的に寄り添う



神奈川県

NPO法人 ウィメンズハウス・花みずき

おおつか かよこ
大塚 加代子さん

秋田県出身。川崎市役所や民間企業で医療相談や母子保健相談の業務に携わってきた経験を原点に、独立し個人事務所をもった後、1999年に花みずきを設立。現在は副理事長を務める傍ら、地域の民生委員としても活動する。

出発点は、地域の女性を対象にした相談業務でした

「ウィメンズハウス・花みずき」は、安心・安全な居場所を必要とする女性に対し、心のサポートや衣食住の支援を行うNPOです。私はもともと川崎市内を中心に、市民の健康や子育ての相談業務に従事していました。相談を通して知り合う女性の9割は、地方出身で身近に頼れる親族がいない状況で、「妻だから」「母だから」とたくさんの我慢を重ねて生活していました。私は、故郷を離れて3人の子を育てながら働く自分の境遇も重ねつつ、彼女たちを応援していました。

転機が訪れたのは、40歳にさしかかった頃です。人生の折り返し地点に来たという現実を前に、定年に縛られず社会と関わり、働き続けたいとの思いが加わり、独立するに至りました。仲間や思いはあってもお金もモノもない状態でスタートしたため、特に初期には社協に足しげく通い、情報や支援をもらいました。行政と住民との中間的な立ち位置にある社協の役割は、とても貴重だと思っています。

自立のめどが立つまで、徹底的に味方になります

設立当時、日本にはまだDVという言葉も浸透していませんでしたが、問題が表面化していないだけで、神奈川県全体でも被害者の受け入れが追いつかない状

況でした。花みずきでも非公開のシェルターのほかに、生活の再建や自立をめざす女性向けのステップハウスも運営するようになりました。支援において意識しているのは、女性たちをジャッジしないことです。生きたい、人生を立て直したいという意味が本人にある以上、背景にどんな事情があろうと、私はその人の味方になって応援する必要があると思っています。

安全のために避難した女性たちと接していると、私たちスタッフもつい内に閉じこもりがちです。花みずきは、知人の紹介で7年前に現在の場所に転居したのですが、通りに面したガラス張りの物件で、最初に案内された時は、こんなオープンな場所は論外だと、スタッフ一同猛反対でした。しかし私たちは、活動に共感してくれる人、手伝ってくれる人、地域の方々、そして何より潜在的な利用者とのつながりを築かなければ、活動を継続することもできません。開かれた団体



ステップハウスの一室。
ここから女性の生活の再建や自立をめざす



地域交流の場「スペースらいらっく」。
ガラス張りの開放的な空間が特徴

としての側面ももち、外に向けた発信を大切にするためにも、ガラス張りの部屋を地域交流の場「スペースらいらっく」として活用することにしました。

変化を恐れず、直感に従う勇気をもち挑戦を続けます

大変な時こそ、好きなものにふれたり、感動や刺激を得る機会をもつことを、私はとても大切にしています。コロナ禍の渦中にあった2020年12月に、20周年記念のコンサートを敢行したのも、そんな思いがあったからです。思い切った決断でしたが、「これからも花みずきを続けていける」と強く思えた瞬間でした。

近年は、支援を必要とする女性の若年化が目立ち、求められるニーズも変化しています。私たちも組織の若返りを図りました。若いスタッフの感性で、新しい団体になるくらいのつもりで、遠慮なく変えていってほしいと思っています。

書籍紹介

『月刊福祉』2023年12月号（全社協出版部）価格1,068円（本体971円）

特集は、「外国人とともに『福祉』で働く」。外国人人材の受け入れに係る制度について確認するとともに、外国人人材をいかに受け入れ、ともに働く環境を整えるのか考える機会とする。（詳細は「福祉の本出版目録」で検索）

災害ソノトキ!

～災害時の連携に向けて、
平時から考えたい協働の視点～

災害時は、被災者をより適切・効果的に支援するために、被災地内外のボランティア・NPO、行政等との連携協働が必要不可欠です。
本連載では、実際に災害VCを運営した社協の取り組みから、災害時の連携や平時の取り組みについて学びます。

第8回 大阪府 茨木市社会福祉協議会

左から、福永さん、安藤さん、石丸さん
マスコットキャラクター
「アイちゃん」とスケくん」の前で

ふだんからのつながりが 被災時の連携における安心感に



茨木市社会福祉協議会
地域福祉課 課長 福永 佳介さん
在宅福祉係 係長 安藤 八枝さん
ボランティアセンター担当
いしまる いつき 石丸 樹さん

茨木市で発生した災害と市社協の対応

2018年の大阪府北部地震において、茨木市内では約1万3千棟の住宅に被害が発生し、ライフラインも一時的に停止しました。

茨木市社会福祉協議会（以下、市社協）では、翌日に茨木市からの要請により市社協会議室に災害ボランティアセンター（以下、災害VC）を設置しましたが、週末に多くのボランティアが来所することを想定し、数日後には市社協が事務局を置く、より広い福祉文化会館1階ロビーに災害VCを移動しました。

地域の多様な関係者による災害VCの周知

発災直後、寄せられるニーズが思ったほど増えず、応援社協職員や運営支援者から「情報発信が少ないのでは」との意見をいただきました。そこで、災害VCの連絡先やニーズ受付票などを記載したチラシを作成し、民生委員や福祉委員に配布していただきました。

ふだんから地域とのつながりがある方々だからこそ、支援を求めている被災者の元へスムーズに入っていくことができたと感じています。

さらには、避難所やスーパーにも掲示していただいたり、地元の高校や国際ボランティア学生協会(IVUSA)の学生にもチラシのポスティングに協力いただき、幅広く地域の方へ周知できたことで、結果として2千件以上のニーズが上がってきました。

プロボノから専門技術を学んだ住民らが 新規にボランティア団体を立ち上げ

災害VCの運営には、前出の方々以外にも日赤、PTA、JC（青年会議所）等、多くの地域関係者に参画いただきましたが、専門性という点でとても頼りになったのがプロボノ（職業上もつ知識やスキル、経験を活かして社会貢献するボランティア）の方々でした。

災害救援レスキューアシストを中心に、一般ボランティアでは難しい屋根のブルーシート張り等のニーズに対応していただけたことで、被災者の幅広い要望に応えることができました。

プロボノの方の中には、以前から参加していた、「おおさか災害支援ネットワーク(OSN)」の会議での顔見知りも多く、連携する際も安心感がありました。

一方でプロボノの方々は、専門性はありますが地域住民とは馴染みがありません。そのため、被災者となぐ際は「現地調査班」の市社協職員と一緒に回るように留意しました。また、災害支援を通してプロボノの活動を手伝ったり研修を受けたりして、ブルーシートを張る技術を身につけた住民の方々が「災害復旧支援 チーム茨木」というボランティア団体を結成し、市社協のVCに登録していただきました。プロボノは、他の地域で災害が発生するとそちらへ向かわれるので、地元でこうした団体ができたことは心強く、災害VC閉所後も市内外から依頼を受けており、市社協も窓口として調整役を務めています。



情報発信を強化すると、多くのニーズが寄せられるようになった

災害VCの認知度を上げるため 啓発活動に取り組む

被災経験を通して、災害VCに対する住民の認知度が低いことがわかりましたので、啓発に力を入れようと住民向けのパンフレットを作り、今後は災害VCの役割についてイラストを用いながらわかりやすく紹介していきます。平時からの地道な啓発活動によって、より速やかな支援につなげたいと思います。

インフォメーション (読者アンケートを実施します ～皆様のご意見・ご感想をお待ちしています～)

『月刊ボランティア情報』が創刊してから、今年で46年になります。これからもボランティア・市民活動に関わる読者の皆さんにとって価値のある紙面となるよう、皆様のご意見・ご感想をうかがうことで今後の紙面づくりに役立てたく、読者アンケートを実施します。

●主な質問内容：感想/掲載希望/おすすめ実践
ぜひご協力をお願いします!!
QRコードまたはURLからご回答ください。
<https://forms.gle/NxCY1saqGspaLNUdU6>

